

Tsukuba Summer Institute for Physical Education と 10 周年記念大会

体育系 TSI 委員会

1. Tsukuba Summer Institute の経緯と成果（報告者：長谷川悦示）

1.1 TSI 2019&10 周年記念大会

Tsukuba Summer Institute for Physical Education（以下、TSI と表記）は、2010 年から筑波大学体育系において毎年 7 月に短期集中の授業・研修イベントとして開催されてきた。本年は 10 周年にあたり、TSI 2019 は 7 月 11 日から 7 月 18 の期間に筑波大学体育系施設ならびに大学会館ホールを使用して実施された。7 月 14 日には 10 周年記念イベントも開催した。本年度の参加者は、University of Queensland（豪）、Ohio State University、California State University、Los Angeles（米）をはじめとした本学の海外協定校等 15 大学から 69 名、筑波大学と共同専攻を開設している鹿屋体育大学から 3 名、そして JICA 課題別研修「学校体育」コースの研修員 14 名（アジア・アフリカ等 7 カ国）、加えて本学学生 22 名の合計 108 名であった。さらに 10 周年記念大会には過去 TSI に参加して大学教員として活躍している TSI Alumni が海外から 6 名、国内から 4 名が参加した。

TSI の講師陣は、本学体育系の教員と協定校の教員を中心とする世界の第一線で活躍する研究者や指導者が担当した。プログラムはすべて英語で行われ、四つの基本コース、(1) CoRP (Collaborative Research Planning：スポーツのホットトピックに関する研究の計画立案)、(2) SPAC (Sport, Physical Activity and Culture in Japan：日本のスポーツ・身体文化理解)、(3) LAB (Laboratory workshop：運動生理学・運動生化学、神経科学、リハビリテーション等の実験方法)、(4) IDS (International Development

through Sport：スポーツによる国際開発) と、それに加えて (5) QSPE (Quality School Physical Education：JICA 筑波の研修員との共同コース、日本の体育授業、教師教育及び授業研究の学修) の五つに分かれた。それぞれのコースは、固有の課題について、講義や演習・実習、グループ討論、発表などの学修活動を英語で議論し、実践力の向上を図りながら、相互理解を深めることを目的とした。コースを越えて、互いの専門領域について学び合うコモンレクチャーやポスター発表、BBQ 野外パーティ、エスカッション等の各種交流プログラムに加えて、筑波大学大学院への留学・進学相談などの個別の研究指導やキャリア形成指導も受けることが可能となっている。

本委員会報告では、TSI のこれまでの経緯と 10 周年記念大会、ならびに TSI の各コースの概要について報告する。

1.2 TSI の発展と TSI 委員会の発足

TSI 発端は 2009 年に文科省の開催した日本の体育・スポーツに関する国際フォーラムで招聘された David Kirk 教授（当時、英国・リーズメトロポリタン大学、現在は英国・ストラスクライド大学）、Jacqueline Goodway 教授（米国・オハイオ州立大学）、Louse McCuaig 准教授（豪国・クイーンズランド大学）の 3 名と、フォーラムの準備を担当した筑波大学体育系の三木ひろみ准教授を中心とする体育科教育学の教員と阿江通良教授（当時、体育専門学群長）とのフォーラム後の反省会にあった。3 名の招聘者からは「今回の国際フォーラムは日本の体育・



図 1 TSI 2019 ホームページより



図2 ネットワークランチ（大学会館プラザ）

スポーツの伝統や文化に対する理解が深まりすごく良かった。できれば筑波大学で毎年夏にサマー研修会（Summer Institute）を開くというのはどうだろうか。」という一つのアイデアであった。

このアイデアは三木先生が中心となり、翌年2010年（7月25日～31日）に第1回 TSI 2010 が開催され実現した。参加者は海外の三つの大学から約25名程度、本学の学生は体育科教育学の大学院生を中心に15名、海外講師は5名が参加した。真夏の期間中は、現在の CoRP コースのみで、全員でのアクティビティ、ランチと毎晩のディナーで構成された。参加者の評価も高く、翌年の第2回も計画することになったが、準備も整った2011年3月に東日本大地震が起り、筑波大学も被災したため中止するしかないと諦めていた。しかし海外から「私たちは日本に行きます。」という多くの励ましのメッセージが送られ、2011年（7月16～23日）に第2回 TSI2011 が予定通り開催することができた。参加者は50名を超えた。

第1回から第3回 TSI 2012（7月27日～8月3日）までは CoRP コースのみであったが、第4回 TSI 2013（7月12日～7月19日）から CoRP に加えて、SPAC と LBA などの複数コースとなり、参加者の規模も80名と大きくなってきた。持続的・安定的に TSI を開催するため、第5回 TSI 2014（7月18日～25日）から体育系 TSI 委員会のもとで運営する組織体制にシフトすることになった。それまでは、体育系の有志教員が分担していた運営・事務手続きを委員会組織のもとで管理・実施することができるようになった。これによって体育系の委員会予算に加えて、大学内外の各種予算に申請することになった。初代の TSI 委員長は岡出美則教授が務め、各体育系内組織から委員が選出された。TSI 委員会体制のもとで、第5回 TSI 2014 では、コアプログラム（参加者全員に対してのプログラムで、各コースの講師によるコモンレクチャー、ネットワー



図3 コモンレクチャー（大学会館ホール）

クラッキング、野外パーティ等）、3コース（CoRP、SPAC、Sport Business & Mangement）で実施された。そして、第6回 TSI 2015（7月14～24日）以降は、コアプログラムと現在の CoRP、SPAC、LAB、IDS の4コースで実施されるようになり、第7回 TSI 2016（7月7日～15日）へとつながった。

第2代の委員長は長谷川悦生准教授が務め、第8回 TSI 2017（7月11～18日）、第9回 TSI 2018（7月10日～17日）、第10回 TSI 2019（7月9～17日）がそれぞれ実施された。これらの三つの TSI では、JICA 筑波との委託事業である課題別研修「学校体育」（研修期間3週間）に参加するアジア・アフリカの研修員が、TSI に参加できるように五つ目のコース QSPE が開設された。JICA 研修員は各国の体育行政や教師教育を担うリーダーの立場にある人材で、日本の学校体育を学ぶために研修に参加している。彼らにとっては、諸外国からの学生と活動を一部共通することや外国人講師のコモンレクチャーを聴講できるというメリットがあった。TSI 参加者にとっては、学校体育の発展途上にある国の実情を理解する機会を提供するものであった。

1.3 TSI の成果と課題

TSI は、筑波大学国際交流協定校と本学体育系による、英語を公用語とする体育・スポーツ科学と日本の身体文化に関する協働教育プログラムである。体育・スポーツ科学と日本の身体文化に関する領域を専攻する協定校と本学の大学生・大学院生等を対象としてきた。

日本の学校体育、競技スポーツ、スポーツを通じた国際開発、スポーツ科学研究等について学び、体育・スポーツの教育・科学・文化に関わる日本と諸外国の現状と課題、研究成果について情報を共有するとともに、多国籍な参加学生のグループの中で、体育・スポーツ教育学、コーチング学、スポーツを通じた国際開発、運動生理学、スポーツ医学等の観

点から、これらの領域の国際的な課題に取り組む課題解決学習を行うことを内容とした。これまでの TSI では以下の目的・目標の達成および成果があったと評価されてきた。

- 1) 体育・スポーツ教育、健康・身体運動・スポーツ科学領域で学んでいる国内外の大学生および大学院生に、自国だけでなく、諸外国の研究者・大学教員から学び、国際的な研究者と関わる機会を提供する。
- 2) 国内外の学生には、英語によるコミュニケーションによって諸外国の学生と協力して活動する経験を通じて、文化差を越えた相互理解と人との関わり方を身につけさせる。
- 3) 将来、国際的な共同研究を行う可能性のある同世代の若手研究者との人的ネットワークを形成する。
- 4) 日本の体育・身体文化についての理解を深め、日本の体育・身体文化がグローバルな人材の育成やウェルネス向上に貢献できることを、国内外に伝える。
- 5) 日本人との交流と日本の大学での生活や教育・研究に関連した活動を通じて、日本での留学生活に対する不安を取り除き、日本への短期留学や正規留学を促す。
- 6) 諸外国の研究者や学生との交流を通じて、日本人学生の海外留学に対する意欲を高める。
- 7) 諸外国の学生を、諸外国の大学教員と共に指導しサポートすることによって、日本人教員のグローバルな人材の育成と教育力を高めるとともに、教育・研究の国際的ネットワークを多角的に広げる。
- 8) 体育・スポーツ教育、健康・身体運動・スポーツ科学領域の中核的組織として、多様な国の多数の大学が関わる国際的な教育プログラムを継続して運営するための組織運営の力や、国際的な教育プログラムを提案・推進するリーダーシップを高める。

これらの成果を今後も発展できるように各コースのプログラムの充実に努めていくことになる。

一方で、これまで TSI 委員会では運用面でのいくつかの課題が取り上げられてきた。一つの課題は海外学生の参加登録であったが、これについては、TSI 2019 から Web 登録システムを立ち上げて、煩雑な手続きは次のような手順で進めた。

1 月には本学体育系と交流協定を締結している大学ならびに交流協定の締結を検討している大学の

連絡調整責任者に本プログラムの詳細について情報を送った。併せて、Web 登録システムの構築により、各参加学生にインフォメーションやプログラム選択・宿泊先の選択・申請に必要な書類等を双方向通信により実施できた。今後もさらに効率的な登録情報を把握できるように改善を重ねる必要がある。

二つ目は、TSI の HP による情報公開を早めに進めて、多方面に情報発信を積極的に進めることが重要である。委員会では、Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport のウェブサイトを開設しており (<http://www.siiit.jp>)、日本語と英語で本プログラムの日程と内容、2010 年から実施している過去のプログラムの内容や動画などを公開している。大学 HP にも経過や結果を記事として投稿したり³⁾、10 周年記念イベントのように一般学生にも一部のプログラム（コモンレクチャー）を公開したりするなど試みてきた。TSI の学内的な認知度をさらに高めるためにオープン化も検討する課題としてあげられる。

三つ目は、受講生の制限についてである。現状は海外学生の参加だけで、人気のある SPAC コースは定員にほぼ達してしまっている。日本人学生と海外学生の定員を別に定めていくか、あるいは同一コースの一部を複数クラスで実施するなどのカリキュラム構成も検討する必要がある。

最後に TSI のような大学規模のグローバルなプログラム運営には教員だけではなく事務方の協力・支援体制がなければ成果を収めることができなかった。ここまでの 10 年間の成果は、実に多くの事務方の献身的な協力を得て初めて成し遂げることができたといえる。今後とも TSI 委員会を中心に体育系の全教員の理解と協力ならびに事務方との運営体制をより効率・効果的にして行くことが肝要である。

来年度からは宮崎明世准教授が 3 代目の委員長を務め、東京オリンピック・パラリンピックの開幕直前の 7 月 7 日から 14 日に、新しい 10 年をめざす TSI 2020 をスタートさせるために準備を進めている。筑波大学の国際交流の一つの代表的プログラムとして、今後とも体育系 TSI が発展・成長していくことが期待される。

2. 10 周年記念イベント（報告者：宮崎明世）

2010 年度から始まった Tsukuba Summer Institute (TSI) は、2019 年度で 10 周年を迎えた。前年度開催時より、これまで中核となって本プログラムを推進してきた教員の間で、TSI の修了生を集めて記念行事 (Alumni) を開催しようという計画が持ち上

がり、海外の教員がそれぞれの教え子に声をかけ、参加者を集めることとなった。これに伴って、例年7日間で開催しているところを1日多く設定し、中日に記念行事を行うこととなった。海外からの参加者はカナダ、オーストラリア、ブラジル、韓国、フランス（日本在住）から6名の若手研究者で、日本からは延べ4名の若手大学教員が参加した。さらに、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を前にTIASと連携して企画が進められた。

具体的な日程と活動内容は以下の通りであった。2019年7月14日(日)10:30-11:30に大学会館小ホールを会場として、TSI参加者及びTIASの学生がポスター発表を行った。その後昼食をはさんで、TSI参加者全員の参加によって、オープニングセッションが行われた。午後のセッションは13:15から、Young Scholars-TSI10周年“Learning and Legacy”として、日本人2名を含めた8名の修了生がプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの内容は、各自の現在の研究活動の報告と、TSIでの経験がその後の研究活動やキャリア形成にどのように役に立っているかなどについてであった。休憩をはさんで15:45からは、“Load to TOKYO 2020”と題して東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の有賀勝氏、TIASの川瀬有輝氏、成松桃子氏らによる東京2020オリンピック・パラリンピックに関する

プレゼンテーションが行われた。シンポジウム終了後会場を移し、修了生を中心とした参加者による懇親会が開催された。10年間にTSIに関わった関係者からのスピーチなども行われ、交流を深めた。

第2日目、7月15日(月)には9時から”Young Scholar Workshop”として、若手研究者が指導教員であるCoRPの教員とともに、今後の研究活動や、研究者としてキャリアを築くためにどのようにすればよいのか、若手研究者の悩みなどについて討論した。TSIの期間中、昼食前の時間帯に開かれている”Common Lecture”では、参加者全員に対して若手研究者から近年の研究成果についての講義が行われた。午後には修了生がCoRPのグループワークに参加して、後輩たちの指導を行った。

TSIは文部科学省のシンポジウムのために来日した体育科教育学の研究者(Dr. David Kirk, Dr. Jacqueline Goodway, Dr. Louise McCuaig)と当時筑波大学の三木ひろみ氏を中心となって、若手研究者の育成や国際交流を目的として開設された。その後コースや招聘講師も増え、行事として定着し、現在に至っている。今年度10周年を迎え、今後の新たな10年に向けてさらに充実した行事となるよう、プログラムの検討や運営管理の工夫を重ねていきたいと考えている。

3. 各コースの概要



図4 10周年記念イベントシンポジウム (7/14)



図5 10周年記念イベント講師陣とアラムナイ懇親会 (7/14)

3.1 CoRP (報告者：小野誠司)

Tsukuba Summer Institute (TSI) 2019 & 10 周年記念大会が、7月9日(火)～17日(水)の9日間の日程で開催された。プログラムは4つの基本コースから成り、そのうちの CoRP (Collaborative Research Planning) は体育・スポーツのホットトピックに関する研究の計画立案をグループワークにより進めるコースとして主に大学院生を対象として実施された。

CoRP の講師は、本学体育系教員および体育科教育学の分野において国際的に著名な研究者である David Kirk 先生 (University of Strathclyde), Jackie Goodway 先生 (OHIO State University), Louise McCuaig 先生 (Queensland University), Sue Sutherland 先生 (OHIO State University) の4名を招いた。

TSI 2019 における CoRP の学生参加者は21名、そのうち本学体育学専攻の学生が4名(日本人学生3名と中国人留学生1名)、国外(米国、オーストラリア、インド、イギリス、ブラジル、韓国)の大学から16名が参加した。プログラムは全て英語で行われ、体育・スポーツの研究方法論に関する講義や演習、各5～6名のグループワークによる研究計画の立案を行った。

プログラム日程は、前半と後半3日ずつの計6日間で実施され、まず第一日に、体育・スポーツに関するホットトピックから各グループの研究主題を議論し、それに基づいた文献・資料の収集と問題提起についての講義、演習を行った。2日目は、各研究内容に沿った仮説を証明するための research theory と研究方法論について学んだ。3日目からは、具体的な研究実施方法と解析・分析方法を考慮した研究デザインとプロトコルの構築についての講義および演習を進め、4、5日目は引き続き研究実施についてのグループワークに加え、研究発表についての方法論、学術的なネットワーク構築についての講義を行った。最終日の6日目は、立案した研究

計画について各グループ15分の持ち時間で英語によるプレゼンテーションを行った。各グループメンバーの担当を決め、全員がプレゼンテーションを行う機会を設けた。

コース全体を通して、研究の構想から仮説、実施方法、予想される結果・結論に至るまでの計画立案、さらにはその成果を伝えるプレゼンテーション技能について、大学院での研究活動に必要な不可欠な要素を講義とグループワークを通じて学ぶ充実した内容であった。特に、日本人学生および英語が母国語でない学生にとって、共通言語(英語)を通して外国人学生とコミュニケーションをとることにより、共通の目的を達成できた経験が自身につながっている様子が窺えたことは大きな成果であったと言える。

今後の課題としては、今回の CoRP の日本人参加者のうち、本学体育学専攻からは3名のみだったことが挙げられる。外国人学生と共に学び、得られた知識を共有する貴重な経験ができるプログラムであるため、今後は、本学および体育学専攻からより多くの学生の参加を期待したい。

3.2 SPAC (報告者：松元剛)

3.2.1 自由科目「日本の体育・スポーツ文化」の位置づけ

筑波大学体育センターでは、2013年度より自由科目「日本の体育・スポーツ文化」を開設している。この授業は、本学学生および筑波大学と学術交流協定を締結している海外の大学からの短期留学生を対象に、1週間のショートステイプログラム(Tsukuba Summer Institute)における1プログラムとして、使用言語が英語のみで実施されている¹⁾。

3.2.2 令和元年度の現状

令和元年度は、7月9日(火)～17日(火)にて TSI が実施され、「日本の体育・スポーツ文化」の受講生数は45名であった。受講生を国別でみて



図6 CoRP グループワークの様子



図7 CoRP レクチャーの様子

みると、5 か国から来日し、アメリカ 27 名、韓国 3 名、ドイツ 3 名、オーストラリア 2 名、ブラジル 3 名、日本 7 名となり、海外からの短期留学生が 8 割以上を占めている状況であった。なお、全体の 5 名が大学院生の受講生である。受講生は、出身国が重ならないように 6 グループに予め編成し、各授業時および最終日のプレゼンテーションでのグループ活動を促した。

授業内容は表 1 に示したとおりである。本学体育系教員および非常勤教員がそれぞれ担当する形式で弓道、剣道、柔道、器械運動、学校体育教材としてのボールゲーム、ダンス、体力測定について実技を中心に行った。また、週の前後半に 1 回ずつ地域の学校を訪問した。小学校の訪問では体育授業を視

察し、また中学校の訪問では、学校側で準備した内容に基づきクラスごとの授業への参加となった。その後、放課後に実施されている課外活動の様子を見学した。

なお、最終日にはグループ活動として、① Briefly summarize the main points of what you learned through the TSI. ② Was there anything that was especially meaningful to you? If so, please explain. ③ What are your specific impressions about PE and sport culture in Japan? ④ How can/will you use of this experience in the future? というテーマを挙げ、10 分間のプレゼンテーションを行い、授業の総括とした。プレゼンテーションの 1 例を図 8 に示す。参加した学生の意見として、数多くの日本の体育・スポーツを各国

表 1 Tsukuba Summer Institute 2018

		TUE 9 July	WED 10 July	THU 11 July	FRI 12 July	SAT 13 July	SUN 14 July	MON 15 July	TUE 16 July	WED 17 July
9:00-11:00	SPAC PROGRAM		Physical Fitness Test & Evaluation (Fukuda)	Dance (Paku)	Visit Elementary School, PE Class at Takezono-Higashi (Mitaba)			Ball Games in PE (Matsu)	Kendo (Nabeyama)	Group Presentations (Matsumoto)
11:30-12:45	Common Lecture								Common Lecture "Kendo" (Nabeyama)	
12:30-14:00	Networking Lunch		Networking Lunch			OFF	10th Anniversary	Networking Lunch		
14:00-18:00	SPAC PROGRAM	Opening Remarks	Judo(Ymaguchi)	Kyudo (Matsuo)	Gymnastics (Kanaya)			Ball Games in PE (Nara)	Visit School Sports Club Activity at AZUMA JHS (Mitaba)	

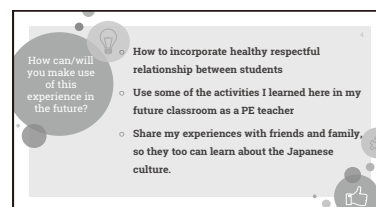
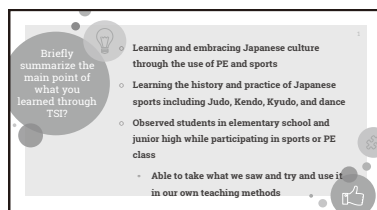


図 8 SPAC プレゼンテーションの一例

の学生同士で体験したことで、日本および他の国々の文化を学ぶことができたこと、さらにはそのことを今後のライフワークに活かしていきたいことなどが述べられ、本授業における教育的成果を垣間見ることができ、本学におけるスポーツを通したショートステイプログラムの継続を強く望みたい。

3.3 LAB (報告者：大森 肇、國部雅大)

LAB (Laboratory workshop) コースでは、スポーツ科学に関連する各専門領域における実験方法について、ワークショップ形式で学ぶプログラムが提供されている。LAB コースは 2013 年から開始されており、例年、筑波大学体育系の教員に加え、体育系の教員が研究交流を行っている海外の講師を招聘し、運動生理・生化学、神経科学、体力学、リハビリテーション、バイオメカニクス等の実験方法について、1 日ごとに 1 名のファシリテーター教員がコーディネートするという形式を基本に実施している。

本年は、海外からの講師として、Stefan Keslacy 先生 (California State University Los Angeles)、Christine Dy 先生 (California State University Los Angeles)、Jeff Janot 先生 (University of Wisconsin-Eau Claire) をお招きした。また、体育系からは征矢英昭先生および榎本靖士先生に講師をお願いした。実習にあたっては大森研究室関係の方々、竹村雅裕先生ならびに竹村研究室の方々、征矢研究室の方々、榎本研究室の方々にご協力いただいた。

LAB コースは 6 日間にわたって実施され、初日の冒頭に本コースのディレクターである大森によりオリエンテーションが行われた。各日の流れとしては、午前中に、テーマに関する各講師の先生からの講義があり、午後にそのテーマに基づく実験実習(データ取得など)を行うという形で行われた。本年は、海外からの参加者(大学生および大学院生)12 名が 5 つの班に分かれ、班ごとに実験データ取得に関する仮説設定などの構想をディスカッショ

ンしたり、データを取得する上で協力したりする作業を行った。そして、最終日には、5 名の先生方のレクチャーおよび実験実習のまとめとして、5 つの班によるグループプレゼンテーションが行われた。大森が座長を務め、講師の先生方ならびに Braun Saori 先生 (University of Wisconsin-Eau Claire)、竹村先生、國部も加わって活発なディスカッションが展開された。これらに加えて、初日のコモンレクチャーでは Keslacy 先生が登場し、脊髄損傷患者に対する運動療法の新展開について講義が行われた。

各日の具体的なテーマとして、1 日目は Keslacy 先生によるアルツハイマー病に対する運動療法の効果に関する講義、Western Blot 法の解説および生化学的手法の実習、2 日目は征矢先生による脳フィットネスの概説と研究室の方々のコーディネートによる軽運動が認知機能に与える影響に関する実習、3 日目は Dy 先生による H 反射に関する概説と実習が行われた。1 日のオフと 1 日の TSH10 周年記念イベントをはさみ、4 日目は榎本先生によるバイオメカニクスで用いられる概念や手法の概説、床反力計を用いたジャンプ動作の測定実習が行われた。5 日目は Janot 先生による心電図に関する概説と測定実習が行われた。

最終日のプレゼンテーションおよびディスカッションでは、実験実習のテーマそのものだけでなく、テーマに関する背景や原理、そして実践面・応用面 (Practical Application) を意識した発表が行われた。以上のことから、参加者が LAB ワークで学んだ内容をよく理解できていた様子がうかがえ、大きな成果が得られたと考えられる。

課題としては、海外からの講師および参加学生に突然のキャンセルがあり、例年 20 名程度の参加者であったものが 12 名の参加となってしまい、突然の変更に対する参加受入人数の調整の問題が挙げられる。また、例年とは異なり今年は日本人の参加者がおらず、上記の直前キャンセルの影響もあつ

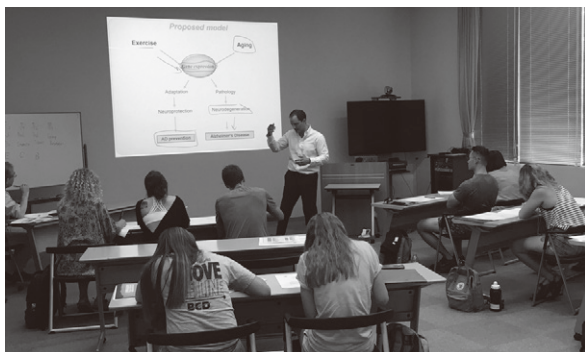


図 9 LAB レクチャーの様子

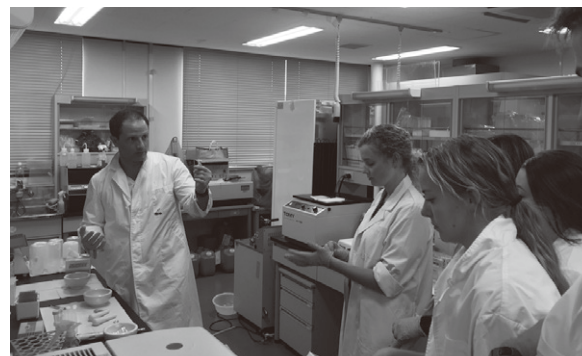


図 10 LAB 実験の様子

て同じ機関に所属する学生の割合が高かったため、参加者間の交流という点では検討する余地があると考えられる。LAB コースだけの問題ではないが、筑波大学の学生に対する募集時期の遅さなども日本人参加者を少なくさせている一因だと思われる。

3.4 IDS (報告者：大石純子)

3.4.1 コース概要

IDS (International Development through Sport) コースは、2015年に、それまでであった Sport Business & Management Program と置き換えられるようにして、TSI (Tsukuba Summer Institute) に組み込まれ、開始されたコースである。IDS コースの内容は、筑波大学・鹿屋体育大学が共同で運営する大学院「スポーツ国際開発学共同専攻」の中の正規授業である「国際スポーツ政策研究 (International Sport Policy Studies)」と「経営マネジメント論 (Management and Organization)」の二つを、集中授業として TSI の中で展開している。当初、これら二つの集中授業は、TSI とは別途の集中授業として独立して行われていた。ほぼ同時期に同一講義棟の別教室を利用して実施していたこともあって、これら集中授業を TSI の中に組み込むことで、より高い教育効果をねらったものである。その狙い通りに、別途実施の時よりも、より幅の広い多くの学生・教員らとの英語を通じたコミュニケーションが授業の内外を通じてなされ、充実した教育が展開されている。

年々 IDS コース受講者も増加し、2019年度の参加者数は15名であった。内訳は、スポーツ国際開発学共同専攻所属7人、体育学専攻所属2名、スポーツ・オリンピック学学位プログラム所属 (TIAS) 1名、海外大学所属5名であった。

正規授業担当者の他に、毎回、ゲスト講師を招聘している。「国際スポーツ政策研究」においては、Daniel Loyce 博士 (Associate Professor in Sociology

of Sport, Univ. Chester, UK) を、「経営マネジメント論」においては、Oscar Mwaanga 博士 (Programme Director - International Sports Management & Innovation, University of London, Ass. Prof. in SDP and Sport management, Southampton Solent Univ., (UK), Founding Chair. EduMove Ltd (UK)) である。両博士とも、2015年のIDSコース開講以来、毎回のように来日にし、熱心に教授してくれている。それぞれの授業は前半の3日間と後半の2日半において展開され、理論ベースの講義と学生によるグループディスカッション及び学生グループによる最終プレゼンテーションという流れになっている。

3.4.2 成果・課題

IDS コースの歴史は5年と比較的短い。そのため、目立った成果はこれからに期待したいところであるが、昨年度受講者のサンパウロ大学学生の一人が、その後、筑波大学研究生として来日し、現在「スポーツ国際開発学共同専攻」入学に向け受験準備を進めているとのことである。IDS という学問を志向する学生の増加は成果の一つといえよう。

IDS コースの授業展開において、現在のところ大きな問題はなく、受講生の満足を得ている。時折、特に日本人及びアジア系学生において英語力不足による講義内容の理解不足、コミュニケーション不足が生じているが、周囲の学生の補助やゲスト講師の配慮により大過はない。運営上の経費については、毎回苦慮している。2名のゲスト講師の宿泊代、滞在費、渡航費などの捻出は TSI 全体の予算に依拠している。充実したコース運営のため、引き続き支援をお願いしたいところである。

3.5 QSPE (報告者：長谷川悦示)



図 11 IDS グループワークの様子



図 12 IDS レクチャーの様子

QSPE (Quality School Physical Education) は、TSI 2017 から五つ目のコースとして TSI に開設されたもので、JICA 筑波の委託事業である課題別研修「学校体育」(3 週間)の一部が TSI の QSPE となっている。2017 年には 16 名、2018 年には 8 名、そして 2019 年には 14 名が参加した。これまでの参加者の出身国は、アフリカからウガンダ、ジンバブエ、ブリキナファソ、マラウイ、アジア・海洋州からミャンマー、ブータン、ソロモン、ツバル、モリジブ、東チモール、フィジー、そしてボスニア・ヘルツェゴヴィナであった。

この JICA 研修プログラムの発端は、2013 年 9 月のリオデジャネイロの第 125 回 IOC 総会において日本の安倍首相が提言した“Sports for Tomorrow (SFT)”国際貢献プログラムであった。この SFT は、アジア・アフリカ諸国の体育・スポーツの困難な状況に対応するもので、2014 年から 2020 年の 7 年間で 100 カ国・1000 万人以上を対象に、体育・身体活動・スポーツの価値やオリンピック・パラリンピック運動を展開するというものであった (SFT の HP)。JICA 筑波からの筑波大学での委託事業は、研修員の評価も高く、2015-2017 の第一期、2018-2020 の第二期、そして 2021-2023 の第三期も更新される予定である。2015 年と 2016 年は 8 月下旬に開催さ

れていたが、2017 年からは開催時期を TSI に合わせて一部プログラムを乗り入れる形で実施された。2019 年は全体では 5 年目にあたる。

研修全体の目標は、「各国の体育教育の現状・課題が整理され、学校体育の普及・質の向上に係るアクションプランが策定される」ことで、単元目標として次の三つが設定されている。単元目標①「日本及び参加国の体育教育の現状が理解・共有される」、②「日本の学校体育に係る政策・施策や教育活動の実践との比較において、参加国における学校体育普及・質の向上に係る課題が整理される」、③「参加国の学校体育の課題に対して、具体的な対策が提案として取りまとめられる」。

図に示すように研修活動が、単元目標に沿う形で計画されている。大きくは、第 1 週「知る (Acquiring)」(インセプションレポート発表、講義) → 「観る (Observing)」(学校訪問等) → 第 2 週「する (Doing)・考える (Considering)・創る (Creating)」(模擬授業、授業分析実習) → 第 3 週「知る (Acquiring)・考える (Considering)・創る (Creating)」(PCM 講義、Action Plan の作成・発表) となっている。TSI の開催期間は、第 1 週の途中から第 2 週の間にあたる。

QSPE を TSI と開催時期を重ねたことによる効果としては、参加者の中には筑波大学への就学を希望

目 標： 各国の体育教育の現状・課題が整理され、学校体育の普及・質の向上に係るアクションプランが策定される。
 単元目標 1： 日本および参加国の体育教育の現状が理解・共有される。
 単元目標 2： 日本の学校体育に係る政策・施策や教育活動の実践との比較において、参加国における学校体育の普及・質の向上に係る課題が整理される。
 単元目標 3： 参加国の学校体育の課題に対して、具体的な対策が提案として取りまとめられる。

第1週	発表 インセプション・レポート(1)	単元目標1	TSI 期 間	
	発表 インセプション・レポート(2)	単元目標1		
知る (Acquiring)	講義 日本の学校体育 (1)：日本の教師教育 Lesson Study	単元目標1		
	講義 日本の学校体育 (2)：学校体育の歴史・特徴	単元目標1		
	講義 日本の学校体育 (3)：教育基本法と学習指導要領	単元目標1		
	講義 日本の学校体育 (4)：体育授業づくりの方法	単元目標1		
	講義 日本の学校体育 (5)：世界のQPE (学校体育) の動向	単元目標1		
↓	見学 日本の学校体育の参観 (1)：授業研究	単元目標1 単元目標2		
	見学 日本の学校体育の参観 (2)：運動部活動	単元目標1 単元目標2		
	見学 日本の学校体育の参観 (3)：大学武道授業	単元目標1 単元目標2		
第2週	↓	する (Doing)	実習 授業づくり・模擬授業 (1)：体づくり運動の実践	単元目標1 単元目標2
			実習 授業づくり・模擬授業 (2)：協同学習モデルの実践1	単元目標1 単元目標2
↓	↓	考える (Considering)	実習 授業づくり・模擬授業 (3)：協同学習モデルの実践2	単元目標1 単元目標2
			実習 授業づくり・模擬授業 (4)：武道 (特異項目) の実践	単元目標1 単元目標2
↓	↓	創る (Creating)	実習 授業づくり・模擬授業 (5)：戦術学習モデルの実践1	単元目標1 単元目標2
			実習 授業づくり・模擬授業 (6)：戦術学習モデルの実践2	単元目標1 単元目標2
			実習 授業づくり・模擬授業 (7)：スポーツ教育モデルの実践3	単元目標1 単元目標2
第3週	↓	知る (Acquiring)	実習 PCM の作成 (1)：概要説明	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (2)：全体像の把握・分析・選択	単元目標2 単元目標3
↓	↓	考える (Considering)	実習 PCM の作成 (3)：課題の把握・分析	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (4)：課題の把握・選択	単元目標2 単元目標3
↓	↓	創る (Creating)	実習 PCM の作成 (5)：目的の把握・分析・選択	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (6)：Action Plan の作成1	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (7)：Action Plan の作成2	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (8)：Action Plan の発表準備	単元目標2 単元目標3
			実習 PCM の作成 (9)：Action Plan の発表	単元目標2 単元目標3

図 13 QSPE のプログラム内容

する者が毎年いるということがあげられる。JICA では SDGs プログラムを立ち上げて引き続きアジア・アフリカの次世代の国のリーダー人材育成に力を入れている。その中には学校体育スポーツに貢献する人材育成も含まれ、筑波大学とも MOU を締結している。来年 2020 は東京オリンピック・パラリンピックの関係で JICA・QSPE の開催は 8 月下旬から 9 月初旬の予定である。今後とも体育系の国際貢献事業として TSI との歩調を合わせて成果を上げていきたい。

- 1) 松元 剛：体育センター自由科目「日本の体育・スポーツ文化」- ショートステイプログラムとしての大学体育 -. 大学体育研究 38：5-8, 2016.
- 2) TSI HP <https://siit.jp>
- 3) 筑波大学 HP <https://www.tsukuba.ac.jp/en/news-list/n201908090955>

参考資料

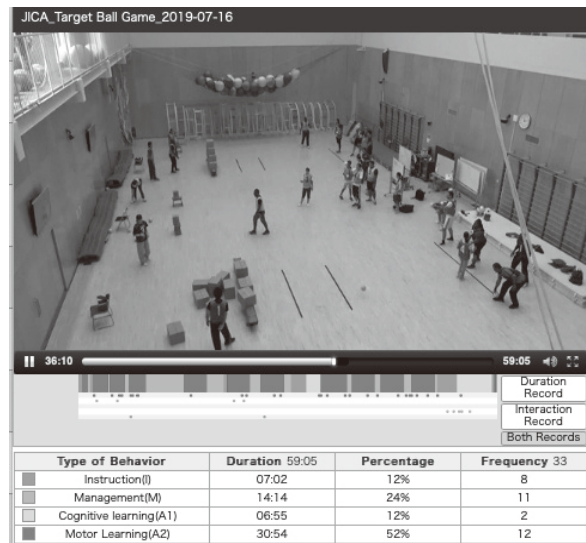


図 14 QSPE 模擬授業ターゲットボールの様子と授業分析